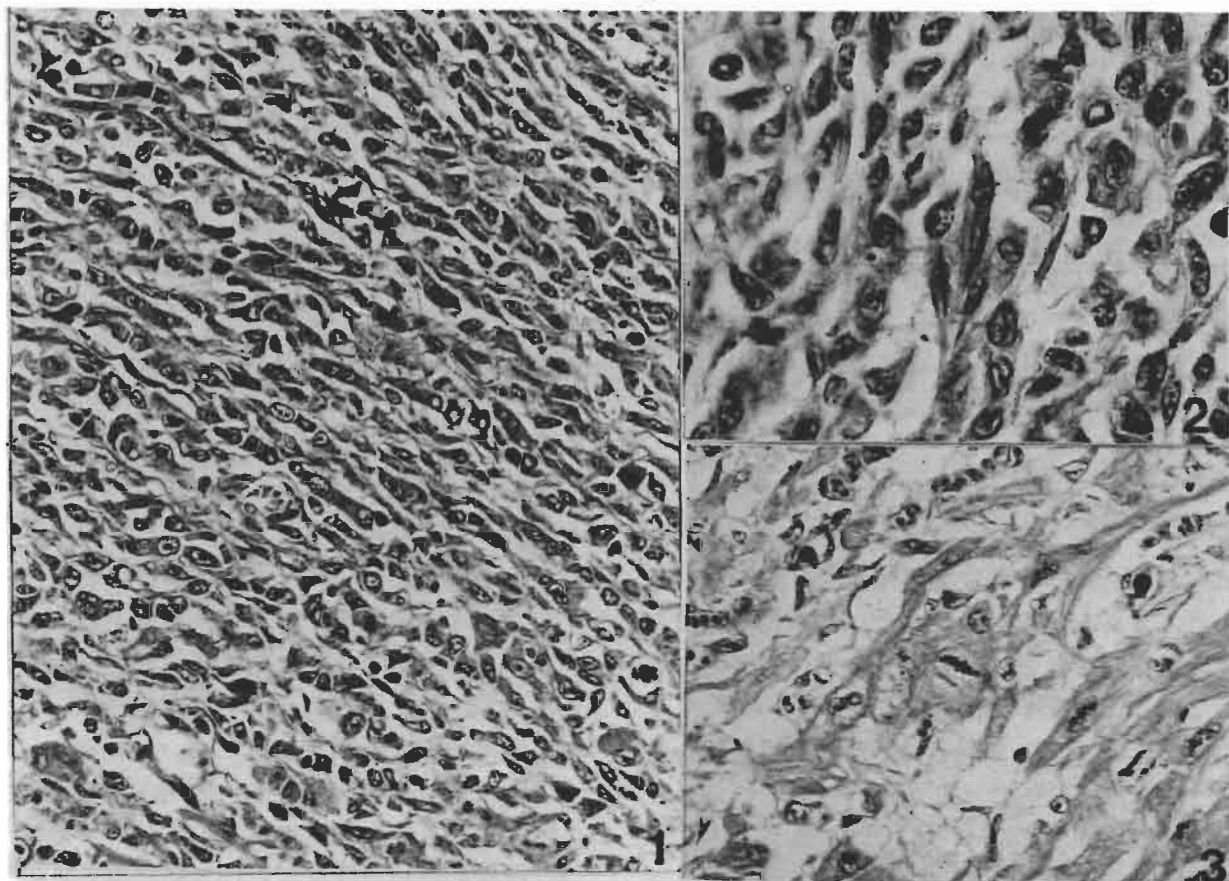


ウシの心臓

帯広畜産大学畜産学部家畜病理学教室出題 第29回獣医病理学研修会標本No.510



動物：アバディーンアンガス種，雄，16日齢。

臨床的事項：本例は生後16日目に突然斃死，生前臨床的に異常は認められなかった。

剖検所見：心室中隔及び左室心筋層に巣状から索状の広範な退色性病巣が認められた。しかし，心臓の外形及び他の臓器に著変は認められなかった。

組織所見：肉眼的に認められた退色性病巣は，主に正常心筋細胞が消失し比較的大ききの均一な紡錘形細胞の集団により構成されていた（写真1，HE染色， $\times 340$ ）。これら紡錘形細胞は明調な円形から類円形の核と好酸性の細胞質を有すると共に，ごく稀に筋原線維様好酸性フィラメントや横紋構造をもつものも認められた（写真2，PTAH染色， $\times 600$ ）。また，病巣内にはしばしば核分裂像や縦に数個の核が連なる多核の細胞も認められた。このような紡錘形細胞は病巣周囲の正常心筋細胞の走行に一致して長軸方向を揃えて規則正しく配列する傾向を示した。また，病巣周囲の心筋細胞には稀ではあるが核分裂像が認められた（写真3，HE染色， $\times 600$ ）。さらに，このような病巣内にはごく稀に残存心筋細胞の変性・壊死も認められた。以上のような本例に特徴的な病変部に

は膠原線維の増加はほとんど認められなかった。しかし，他の部位には線維化を示す部位や心筋細胞が脱落し空虚な間質のみが残存する部位も散発的に認められた。

考察及び診断：本例に特徴的な紡錘形細胞は組織学的に心筋細胞由来と考えられた。研修会々場において，これら紡錘形細胞の増殖を腫瘍とする意見が出されたが，これらの細胞は肉眼的・組織学的に自律的な過剰増殖を示さず単に心筋細胞の消失部を補うように増殖していること，他の部位には線維化等の変化が認められることより，我々は紡錘形細胞の増殖を心筋細胞の消失に伴う再生性の変化と考えた。

本例は肉眼的に仔牛の心筋型白筋症に極めて類似すると共に，組織学的にも線維化や稀ながら心筋細胞の変性壊死も認められる。HadlowはComparative Neuropathologyの中で仔牛の心筋型白筋症において，組織学的に心筋細胞の再生と思われる紡錘形細胞の増殖を特徴とする症例が存在することを記載しており，本例の組織像は上記記載の症例と極めて類似し同一疾患と思われた。以上のことより提出標本の診断は「仔牛の心筋型白筋症(再生型)」とした。